

第30号
2015年 3月1日

○発行
650-0004
神戸市中央区中山手通
7丁目25-38
神戸真生塾広報誌編集係
TEL (078) 341-5897
FAX (078) 341-8239
E-mail: kouhou@koshinsei-j.org

○振替口座
郵便振替01100-8-18680

山路理事にインタビュー

社会福祉法人神戸真生塾 理事
山路司法書士事務所

山路 正明



☆社会福祉に携わることになったきっかけ

社会福祉に携わる機会には、神戸真生塾の役員になるまでほとんどなかった。高校2年生の時に芦屋山手教会から神戸教会に転会しており、その中で当時の神戸真生塾の理事長・施設長であった水谷愛子氏に出会う。物事をはっきり話される方で、高校生の自分にとっては反抗の必要なとても怖い存在であったが、水谷愛子氏がどういう方か分からず、現理事長である富川直彦氏に水谷愛子氏の事を聞いて神戸真生塾という施設の存在を初めて知った。しかし施設の働きがどういったものかについては何も知らず、聞いた話もおぼろげに残っているだけであった。大学生になってからも社会福

祉というものに触れる機会もなく神戸真生塾に関わる機会は全くなかったが、社会人になって改めて神戸真生塾について話しを聞く機会があり、地域における施設の役割について初めて知ることとなった。

また、社会人になって、神戸YMCA少年サッカー部の立ち上げに関わる事で初めて神戸真生塾の元理事長で、当時神戸YMCAの総主事であった、故今井鎮雄氏と出会ったことを憶えている。

その後神戸真生塾の建て替えにあたっての届出書類の作成、また法人決算の時の登記等で司法書士としての仕事の依頼を受けて来た。

その中で昔から交流のあった、現理事長や現施設長が施設に戻って運営に関わっている事を知り、役員を断り切れず引き受けて今日の関わりがある。

☆施設の印象

自分が書類の作成や理事会で施設に来る時には子ども達が不在の時間が多いので施設が静かで寂しく感じたが、納涼大会や

クリスマス会に参加すると賑やかで活気があり、子ども達の活き活きした姿が見られ素晴らしいと思う。若くてしっかりした職員や役員の方々が子ども達のより良い生活の為に懸命に知恵を出し合ったり、児童虐待の予防や子どもの人権擁護に尽くすために積極的に行政に働きかけなど具体的に動いている事が伝わって来て、そのことは子ども達にとってとても良い事だと感じている。

神戸真生塾は、社会の宝である子どもを預かり地域で育てるという役割を担う、社会的に大きな役割を持つ大切な場所であると思う。

自分で社会福祉を勉強するこ



とはできていないが、このような役割を持つ施設に関わることが出来ているのは光栄なことだと感じ、自分の出来る範囲でこれからお手伝いが出来たらと感じている。

☆子ども達にメッセージ

自由を大事にしてほしい。自由というのは自分がやりたいことや好きなことをしてもいいということであるが、自分勝手に振る舞っても良いというわけではなく、その自分の行動には自分自身の責任が付いてくる、そのことを忘れてはいけない。

最近の子ども達は虐待などの様々な問題を抱えているが、自分で夢を持ち、その夢がどうすれば実現させられるか懸命に自分自身で考えたり調べたり、周りの人の助言を受けたりして何とか夢を実現させてほしいと思う。

(インタビュー…金岡)



《児童養護施設 神戸真生塾》

クリスマス祝会

二〇一四年のクリスマスも皆様と共に、イエス・キリストのご生誕をお祝いすることができ、感謝申し上げます。

聖誕劇では、今年もアンケートを取り配役を決めましたが、希望が叶ったりそうでなかったり、悲喜こもごものスタートでした。ふざけて注意を受けたり褒められたりしながら、練習を重ねました。

そんな中で本番当日を迎えましたが、さすが神戸真生塾の子どもたち。当日は緊張しながらも、一生懸命演じました。

続いて、乳児院の可愛い子どもたちによる演日です。途中、舞台から落ちるハプニングもありましたが、怪我もなく最後まで皆に癒しを届けていました。そして今年も教員合唱団の



方々が、すばらしい歌声を披露して下さいました。現役を退いてもなお、社会貢献してくださる人生の先輩方を尊敬しています。

そしていよいよ、子どもたちと職員有志による、ヒップホップダンスです。今回は難しいダンスに頑張って挑戦したいと希望した子どもたちの参加となり、難易度の高いパフォーマンスになりました。練習中、喧嘩もしましたが見事なダンスを披露し、踊り終えた子どもたちは自信に溢れていました。

ヒップホップを指導してくださる皆様は、この数年ボランティアとして施設の大きな行事の度に子どもたちと行事を盛り上げてくださり、神戸真生塾と良好な関係が築かれています。

最後は、大きな樹の壁面の披露です。今回はSちゃんの素敵な原案に皆のアドバイスも入れながら『世界に一つだけのクリスマスツリー』の制作に取り組みました。

将来の夢を書いた色とりどりのハート型の用紙が「葉」になり、「根っこ」の部分は、職員

に支えられているという意味を込めて全職員の応援メッセージを書いた手型を貼りました。そして、真生塾のシンボルである「愛」の文字を中心に据えました。一ヶ月半かけて皆で協力し合い、愛がいっぱい詰まった、素敵なクリスマスツリーの壁面の完成です。一人では成し得ないことも、皆の力が集まればこんなに大きな作品も作れるんだということも、実感したと思います。締めくくりに、皆でAIのハピネスを歌いました。

(岡本)



クリスマス食卓会

今年も十二月二十四日にクリスマス食卓会を行いました。子ども会のメンバーが主となって、食事会の約束ごとを決め、食事のメニューも「クリスマスにはこれが良いかな？」と意見を出して話し合いました。今年もハンバーグやピザ、ささみチーズカツ、ポテトといった豪華盛りだくさんメニューです。クリスマスに欠かせないチキンとケーキなど、大好きなおかずがテーブルの上に並び、子どもたちは大喜びで、二時間では足りない程たくさん食べました。ケーキの上ののっている砂糖菓子が大好きで、じゃんけんして誰が食べるのかを決めます。負けて悲しい思いをしている友達がいたらそっと分けてあげる姿を見ていると、温かい気持ちになりました。

事をとることが少ないので、貴重な時間を過ごすことが出来ました。クリスマス食卓会の時、子どもたちはよくお手伝いをしてくれました。ご飯を運んでくれたり、温めてくれたり。

「私がやるよ」という優しい気持ちで本当に嬉しいです。毎年恒例のクリスマス食卓会ですが、子どもたちにとって特別な日になるよう、また私たち職員も子どもたちと共に過ごせるのできるこの行事を大切にしようと思っております。来年もこの楽しい行事を続けられるように工夫していけたらと思います。

最後に、ケーキやお菓子などを「寄贈くださった皆様、本当にありがとうございます。」

(中道)



みんな大好きお餅つき

二〇一四年十二月二十七日毎年恒例の餅つきが行われました。

餅つき当日は寒さが厳しかったものの、太陽が眩しいほどの天気にも恵まれ、最高の餅つき日和になりました。

職員や中高生の男の子たちが朝早くから準備に取りかかっていました。その間他の子どもたちは餅つきが始まるのを首を長くして待っていました。

「お餅つき始めるよ〜」という声が掛かると、一斉に部屋を飛び出した幼児や小学生の子どもたち、施設長や中高生のお兄さんが餅つきをしている石臼のまわりで眼をキラキラと輝かせています。



みんなどうやってお餅が出来上がるのか興味津々です。

「よいしょ〜よいしょ〜」と、大きな掛け声で餅を突き上げると

「わあ〜めっちゃ美味しそう〜」と大喜びしていました。

次は、子どもたちの出番です。「お餅つきしたい子いる？」と声を掛けると、乳児院の子ども達も加わってすぐに長い列が出来ました。中高生の男の子が、小さい子どもが重たい杵を持ってつくときに、後ろから優しく支えてあげています。重たい杵を軽々と持ち上げて「それっ！」の掛け声に合わせて、いっぺん力強い姿を見ると、いつの間にか心も体も大きく優しい子に成長したなあと感じ、職員

の心がつきたてのお餅のように柔らかく温かくなりました。餅米が柔らかすぎたこともあって、丸めるのが大変でお店のようにはきれいな形にはなりませんでしたが、それでもつきたてのお餅は、とても美味しく、きなこ、砂糖醤油、大根おろし、あんこ、海苔等を、皆それぞれに好きな物をトッピングしまし

た。何度もおかわりをする子どもが続出でした。天気が良かったので、そのまま庭で餅と一緒に昼食のけんちん汁とみかんも食べました。外で食べると、いつも以上においしく感じられ、どのメニューもよく食べていました。食べた後、職員と一緒に片づけを手伝ってくれる子どもも何人かいて、最後まで子どもたちと職員のにぎやかなおしゃべりや笑い声の絶えない素敵な餅つきになりました。



(起)

年越しカウントダウンイベント

二〇一四年大晦日、中高生四名と職員二名で、須磨水族園で行われたパーマネントフィッシュによるカウントダウンイベントに行きました。パーマネントフィッシュは神戸を中心に活動するアカベラグループで、三年前に神戸真生塾の納涼大会に来て素晴らしいハーモニーを聴かせて下さった時から子ども達はファンになり、色々なイベントに行っています。数年前からこのカウントダウンのイベントに行きたいと言っていました。今までなかなか実現せず、今回ようやく念願かないました。

「こんな時間に外出するのは初めてやわ」
「毎年部屋で年越しするから今年はいつもと違う！ドキドキする」
と言いつつ嬉しそうに出発しました。須磨海浜公園の駅へ到着するとまずごはん何を食べようと言う会話になりました。何を食べるか迷いながら年越しそばを食べたり、からあげを食べたりしました。「普段食べられないもんぱっかりやから嬉しいな」と喜んでいました。

憧れのパーマネントフィッシュを近くでみることで、興奮気味でイベントを楽しんでいました。

最後に子どもたちを部屋まで送っていくと

「お姉ちゃん、今日はありがとう、楽しかった」

と話してくれ、子どもたちにとって良い経験になったと思います。普段中高生とゆっくり過ごす時間をなかなか持てていなかったのも、私たち職員にとっても貴重な時間を過ごすことができました。

これからは子どもたちと一緒に今まで経験したことのないことにチャレンジし、共に楽しめたらと思います。

(石津)



巣立ちゆく子ども達から...

武本 優寛

僕は、中学三年生の冬というとても中途半端な時期に神戸真生塾に入所しました。集団での生活は今まで経験したことがなかったもので、入所が決まっただけは不安でいっぱいでしたが、優しい職員のお兄さん・お姉さん、先輩や後輩に温かく迎えてもらい、すぐに施設の生活に馴染むことが出来ました。

その中で、受験の時、中学校の時から勉強が疎かになっていった僕は、勉強に自信がなくなるとも慌てていたのですが、お兄さんやお姉さんに応援してもらい、先輩にわからない問題の解き方を教えてもらったりして、無事志望校に合格することが出来ました。

そして僕は就職に役立つたくさんの資格を取得することが出来ました。僕の就職先ではもっとたくさんの資格を取得しなければなりません。高校三年間での経験を活かし、仕事をする上で必要な資格を全て取得し、「この人なら仕事を安心して任せられる」と言われる人材になりたいです。



僕にとって神戸真生塾は、人と人の繋がりを深め、退所してからもずっと見守ってもらえる親のような存在だと思います。今年の春から社会人として神戸真生塾を旅立ちます。四月から新しい環境になり、今度は会社の寮に入ることになる為、三年前のように不安でいっぱいです。

でも今回は自分は職員や神戸真生塾のみんなに応援されているという気持ちがあるので、新しい環境でもきつとうまくやって行けると思います。これからも大変なことや辛い事がありますが、応援してくれる人たちの事を思いながら頑張りたいです。

城 力道

僕は一八八年間神戸真生塾で育ちました。色々な経験をさせてもらいました。真生塾での一番の思い出は夏の琵琶湖キャンプです。ひたすら琵琶湖で泳いで自然を感じるのがとても好きでした。

僕は中学生の時に将来は農業がしたいと思い、兵庫県立篠山東雲高校に入学しました。真生塾から篠山まで通う事ができなかったもので、施設を離れて篠山に住んで学校に通いました。篠山東雲高校では様々な事を学びました。農業の基礎や農業の機械の事、家畜の飼育や出荷について教わりました。農業はとても奥が深く楽しいと思います。

僕は高校を卒業したらやはり農業に関係のある仕事をしたかったのですが、農業の仕事に就くのは難しく、その夢は叶いませんでした。でも就職が何とか決まって無事卒業出来る事になったのは、真生塾のお兄さん・お姉さんのおかげです。学校で先生に指導を受け、保護者呼び出しがあった時も、一目散に駆けつけてくれました。僕はいろんな人にとってもお世話になりました。

子どものごきげん

☆「チラチラ保育園見える〜!」とK君。さらさら保育園のことかな?

(四才・男児)

☆「お姉ちゃん誰と結婚するん?」
「王子様とだよ!」「え、本物のおじいさまっておるん?」

(六才・女児)

☆「見て!チンパンジー咲いてるで!」とK君。よく見るとパンジーでした。

(五才・男児)

☆迷路をしている時、「お姉ちゃんスカートどこ?」と聞いてきました。スカートじゃなくてスカートだったね!

(五才・女児)

☆職員が帰る際、「お姉ちゃん、コンパクトした?」コンパクトって言いたかったのね。眼鏡のまま帰ろうとしていたので助かったよ!

(小一・女児)

☆テレビのお見合い番組を見て「お姉さんが結婚するためにはこの番組に出るべきやけど、真生塾の名前がテレビに出るのは困るし、俺も複雑やねん」テレビに出なくても結婚できるよに頑張るね

(中三・男児)



僕の好きなアーティストにかりゆし58という沖縄のグループがいます。そのグループが歌う「ウージの唄」という曲の歌詞の中に「憎むより愛せ」という部分があります。僕は周りの友達とは親と暮らしているのに、なんで自分だけ児童養護施設で育って親と暮らされへんのかとか、施設に入れた親を憎むのではなく、周りを愛そうと思うし、愛してほしいと思います。普通の家において親と暮らしているから幸せに育つとは限らないと思います。施設に入っているも幸せだと思えます。

僕はこの一八八年間、施設に入っていた事を不幸とか、自分だけなんでこんな風になったのかとか全く思いませんでした。それは真生塾の職員が自分の子どものように育ててくれたからだと思います。

一八八間大事に育ててくれてありがとうございます。

《乳児院 真生乳児院》

子どもたちの事故を防ぐ取り組み

真生乳児院施設長

愛こどもクリニック院長

數田紀久子

乳幼児が生活している場では、小さなケガから病院での処置が必要な大きな事故まで危険がいっぱいあります。

最近のお母さんの中には携帯電話を使いながら、あるいはテレビやビデオを見ながら子育てをする人も多く見られますが、上の空で子どもと関わる様な事がないように、しっかりと子どもを見つめて、声をかけて、触れて、楽しんで、育ててほしいと思います。その中で子ども達は情緒豊かに成長していきますが、特に3歳までの乳幼児に対しては、保護者の目と耳と支えが常に必要です。

乳幼児の事故のほとんどは大人の責任です。生まれて半年を過ぎると落下と誤飲・誤嚥は要注意です。食べ物や飲み物を入れるのは当たり前ですが、何でも口に入れていくので玩具や砂や石も口に入れます。思いがけない物の誤飲や誤嚥から窒息することがあります。一人で動き回ることができる児では浴槽やプールで溺れることがあります。これも保護者の目があれば防げる事故です。

真生乳児院には保育の専門家といえる保育士、子どもたちの健全な発達を支える

る臨床心理士、食を支える管理栄養士と調理師、病気や看護の面のサポートをする看護師など様々な職種の人が集まっています。子どもたちを事故から守るために、少なくとも乳児院では子どもがどこで何をしているかを常に把握する事、戸外での遊びや遊具で遊ぶ時は必ずそばにいる事、外では必ず手を繋ぐ事など、当たり前前の事がおろそかにならないように、乳幼児を過信しないように職員全員で引き続き取り組んでいきたいと思います。



医務の役割



私たち看護師は、日々子どもたちの健康と安全を守るため、交代で医務係として関わっています。

夜勤者からの申し送りから始まり、必要に応じてクリニックへの受診を行います。そして、各部屋の保育士から日々の様子などの情報を聞いて回り、観察し、その情報を夜勤者への申し送りに繋げています。

日頃から、保育士や栄養士、心理士、家庭支援専門相談員などと連携を図りながら過ごしていますが、子どもたちは転倒したり、落下したり、口の中に何かを入れるなど、至る所に危険が潜んでいます。



す。

大きな事故には繋がらなかったものの、危険だと感じたことは「ヒヤリハット」という用紙に書いてもらい、毎月職員会議で情報を共有し、全職員が一緒になって予防策を検討しています。

また、乳幼児突然死症候群や窒息などの早期発見のために、0歳児には必ずベビーセンサーを設置し、全児睡眠時には15分毎の睡眠チェック表を用い観察を行っています。

院内研修では、救急の対応法としてAEDの使い方、心肺蘇生の練習や誤嚥時の対処方法を繰り返し実施し、職員全員が適切に対応出来るように日頃から取り組み、子どもたちの健康と安全を守ることの重要性を警鐘しています。

(喜多)



《保育所

真生きりぎり保育園》

二月の園だより

園長 上杉 徹

「先生の合図で、グループの先生の所に集まるよ。」笛の合図を受けて、子どもたちは保育室の真ん中にある、それぞれの先生の所に集まり、その場で頭を抱えて蹲りました。担当の先生が子どもたちの上に被さり、一分間その姿勢を保ちました。どのクラスの子どもたちも真剣な眼差しで息を潜めて時間が過ぎる事 waited していました。一月十六日の、絆の日に実施したシェイクアウト訓練（避難訓練）での子どもたちの姿です。

「自分のいのちは自分で守る。」幼い子どもたちに伝える事は中々難しいですが、年長クラスの子どもたちの姿を見て、何となく〇歳児・一歳児クラスの子どもたちもわかり始めていたようです。近年、国内外を問わず様々な自然災害が発生し、たくさんさんの「いのち」が犠牲となっています。これからも保育の中で子どもたちに自分の身を守る事を伝えていきたいと思ひます。

さて、聖書の中に「一つの体、多くの部分」というたとえ話があります。人間の体は一つであっても、多くの部分から

成り立っています。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、頭も足に向かって「お前たちは要らない。」とも言えない。体は一つであります、目や口を始め、手や足など体の各部分は働きが異なるけれども、みんなが協力して助け合い、それぞれの部分がお互いに配慮し合って体が組み立てられていると描かれています。その後に「一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」という言葉が続きます。

保育園も一人ひとりの子どもたちは異なった賜物を持っています。そして、働く職員もそれぞれの持つ賜物と役割が異なります。しかし、お互いを尊重して向き合い、大切にする事によって保育園が成り立っています。二月の聖句は「あなたがたには、もっと大きな賜物を受けるよう熱心につとめなさい。」としています。この聖句は「一つの体、多くの部分」のたとえ話の最後に出てくる言葉です。それぞれが自分のためだけに一生懸命に努力するのではなく、与えられた賜物を最大限に生かしてお互いが仕え合うことで、高め合う事ができます。一人の子どもが尊ばれば、すべての保育園に関わる子どもたち、保護者、職員が共に喜ぶ、その様な保育園になるように努力していきたいと思ひます。

子どもの様子

〜十二月の園だよりから〜

りんごぐみ・めろんぐみ

【四・五歳児】

どんなに寒
い日でも「先生、今日は外行ける？」の声
が聞こえていま
す。特に、先
日の雪が降つ
た日は大は
しゃぎの子ど
もたちでした。
外遊びは、鬼ごっこやドッジボールを
友達と一緒に体を動かして元気に遊んで
います。



さて、十二月はクリスマス会に向けて
聖劇を作りあげていきました。讃
美歌は昨年の経験がある子も多いため
か、あつという間に覚えてくれていま
した。台詞はなかなか覚えにくい子や、
恥ずかしさから声を出しにくい子もい
たりしました。でも、みんなとても頑
張って取り組んでくれていたと思ひま
す。そしてなにより、「今日は聖劇する
の？」と笑顔で聞いて来てくれ、準
備の声をかけると舞台の準備を進んで
手伝ってくれた事は嬉しかったです。

おつきさまのうた」とシンクグでは、
子どもたちの素敵なたた声の聞く事が

できました。最初はうたの声が小さい子どもたちも、日に日に声が出てきて、友達と一緒に遊びながらいろいろな場面でお口ずさんでいました。子どもたちが2つの歌を受け入れてくれた事が嬉しかったです。

最近の子どもたちの保育室内でのブームは「紙」です。描く事がメインだった子どもたちですが、ハサミやのり、時にセロテープを使って楽しんでいきます。一人が何かを始めると、同じようにしてみようとすると子どもが増え、また、その子どもたちから新しい遊びが生まれ、また真似をして見たり…。紙だけでなく玩具遊びも同じです。ただ、一緒に遊ぶ中で玩具の取り合いや、順番の取り合いや、意見が合わない事からのけんかは絶えませんが、一月からも元気いっぱいりんごぐみ、めろんぐみの子どもたちと楽しく過ごして行きたいと思ひます。

（廣瀬加恵・森本みずき）





上つてい
ます。し
かしなが
ら、プレ
イルーム
を児童養
護施設と
児童家庭
支援セン
ターで共
有してい

《子ども家庭支援センター ロータリー子どもの家》 新規プレイルームの開設

臨床心理士 立川裕佳

子ども家庭支援センターロータリー子どもの家では児童家庭支援センターとして地域の子育て家庭に対する相談やイベント・講座などの開催を行い、年々、相談が増え平成25年度には1,353件に達しました。区役所での健診で発達の遅れを指摘されたケースや、神戸市子ども家庭センター（児童相談所）からの通所指導委託ケース、DVを目的の当たりしてきたという心理的虐待を受けた子どものケースなど、理的ケアが必要な相談が増加傾向にあり、平成25年度のプレイセラピーはの

ため、セラピストが常駐していてもプレイルームを使用できない状況が起き始めていました。そこで、この度、神戸やまぶき財団様より助成金をいただき新しくプレイルームを開設することができました。

様々な相談内容および子どもの年齢や性別に対応できるプレイルームにするために、トランポリンや砂などを用いて感覚を統合できる体験となる遊具や、自己像や家族像などを表現できるような人形を表現できるようなパンチングの遊具や、体を動かすことができる大型遊具、自分の世界の表現を促進するような遊具（工作道具・木のおもちゃなど）なども充実させることができました。

様々な遊具をそろえられたことで子どもの発達・興味に応じた遊具を準備することができるようになり、実際にプレイルームの使用を始めると子どもたちの動きが活発になったり、自己表現が豊かになったり、発達を観察できる機会も多くなりました。

これからもプレイルームを開設したことに満足することなく、地域のニーズにそくした地域支援の充実、そして質の向上を図っていききたいと思います。
最後になりましたが、神戸やまぶき財団様には心より御礼申し上げます。



《自立援助ホーム 子供の家》

「人の存在」を感じる

主任指導員 網谷仁志

各関係機関の皆様方のご支援により、自立援助ホーム子供の家を開設してから4年を迎える事が出来ました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

家庭の事情で若くして社会的自立を強いられる子どもたちの為に、何か力になれないか、「自立」とは何か、「援助」とは何か、そして「福祉」とは一体何かとより良い関わりを求めながら日々を過ごしています。

生きていく上で、人生には幾度か危機的状况が訪れる事があります。その困難を乗り越える時、心の中に誰かの存在がいるという事が、大きな支えとなるのではないのでしょうか。「自分の事を気にしてくれる人がいる」「自分を受けとめてくれる人がいる」「自分は独りではない」と。心の中に誰かの存在が生きている。共に生活をしている人、遠くから応援をしてくれる人、過去に出会った様々な人、誰かが子どもたちの心の中に存在すれば、きっと日々を生きていける。それを選ぶのは本人であっても、私たちは誠実に優しさを持ちながら、子どもたちに向き合っていくことが大切だと思います。

そんな想いを込めながら、子供の家は多くの人たちに関わって頂いています。この広報誌を読んで下さる支援者の方々の、暖かい想いがいつしか、子どもたちの心に届く事を願って、日々を積み重ねています。

福祉とは誰かの存在を心に感じ、優しさのバトンを後世に受け継いでいく事ではないだろうか、と考えています。

10年、20年先の未来を担う子ども達。事情があつて親が支えられなければ、社会の大人が支えれば良い。支えられた子どもたちが、いつしか支える側の大人になれる様にと願いを込めながら、支援に努めたいと思います。

今後ともどうか「自立援助ホーム 子供の家」のご支援を宜しくお願い申し上げます。



皆様のご意見、ご要望をお聴きしています。

神戸真生塾苦情処理委員会

- 苦情受付担当者 久山 啓 (子ども家庭支援センター
ロータリー子どもの家 センター長)
森本 みずき (真生きらきら保育園 主任保育士)
網谷 仁志 (神戸市立自立援助ホーム子供の家 主任)
- 苦情解決責任者 富川 和彦 (児童養護施設 神戸真生塾 施設長)
数田 紀久子(乳児院 真生乳児院 施設長)
上杉 徹 (保育所 真生きらきら保育園 園長)
竹原 裕昭 (神戸市立自立援助ホーム子供の家 施設長)
- 第三者委員 森光 規之(当法人 監事)
中村 悦子(主任児童委員 中央区山手地区民生委員児童委員)
- 苦情受付件数 平成26年11月より平成27年2月末まで 3件

ロータリー子どもの家は、児童福祉法に基づく児童家庭支援センターとして、神戸市から認可を受けています。

二〇〇五年度の四月より、従来の活動とともに、子どもと家庭についての専門相談機関として、働いています。



毎日、午前9時〜午後6時、緊急のご相談は夜間もOKです。

子育てに
困った時は
先ず電話！

子育てホットライン(相談専用)

TEL.078-341-6493

神戸真生塾子ども家庭支援センター
(ロータリー子どもの家)

Homepage <http://www.rotary-kodomoie.org/>

編集後記

2005年に創刊した広報誌「愛」は、今号で第30号を迎えました。創刊当時は、児童養護施設、乳児院、地域子ども家庭支援センターロータリー子どもの家の3施設でしたが、今では真生きらきら保育園、自立援助ホーム、愛こどもクリニックと病児病後児保育カンガルも加わりました。改めて創刊号から記事を読み返し、懐かしさがこみ上げると共に、社会の変化に対応しながら子どもの心に愛を与えられる養育を目指す職員の思いが受け継がれていることを再認識しました。

これからも子どもたちのよりよい幸せを願い、心に寄り添っていきたいと思います。

最後になりましたが、広報誌発刊にあたりご協力をいただいた皆様、日頃からお世話になっている皆様方へこの場を借りてお礼申し上げます。

(中野 麻衣子)

